

# 令和7年（2025年）の吾妻山の火山活動

仙台管区気象台  
地域火山監視・警報センター

火山性地震は少ない状態で経過しました。浄土平傾斜計では、2023年9月下旬以降浅部の緩やかな収縮を示す地殻変動がみられていましたが、2025年5月中旬以降は概ね停滞しています。その他の観測データを含めて火山活動の活発化を示す変化は認められず、概ね静穏に経過しました。

## ○ 噴火警報・予報及び噴火警戒レベルの状況、2025年の発表履歴

2025年中変更なし	噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）
------------	----------------------------

## ○ 2025年の活動概況

### ・地震や微動の発生状況（図1-④⑤、図2～3）

火山性地震は少ない状態で経過しました。また、長周期地震<sup>※1</sup>や調和型地震<sup>※2</sup>（BP・BT型地震）は観測されませんでした。

火山性微動は観測されませんでした。

※1 周期が10秒程度と長い地震です。浅い領域の熱水や火山ガスが関与していると考えられます。

※2 調和的（基本周波数とその整数倍で構成される）な波形を特徴とする地震です。

### ・地殻変動の状況（図1-①⑥、図4～6）

浄土平観測点（大穴火口から東南東約1km）に設置している傾斜計では、2023年9月下旬から大穴火口方向の沈降を示す変化となっていました。2025年5月中旬以降概ね停滞しています。また、GNSS連続観測の大穴火口周辺の短い基線の一部では2023年9月から縮みの変化となっています。

GNSS連続観測の吾妻山周辺の長い基線の一部では、2022年5月頃から2023年6月頃にかけてわずかな伸びの変化が観測されていましたが、2023年7月以降は停滞しています。

### ・噴気など表面現象の状況（図1-②、図7～18）

上野寺監視カメラによる観測では、大穴火口の噴気の高さは一時的に200mを観測しましたが、その他の期間は100m以下で経過しました。浄土平監視カメラ（東北地方整備局）による観測も含め、大穴火口付近及びその周辺の噴気の状況に変化は認められませんでした。浄土平3監視カメラの熱映像データの解析では、2023年後半以降、大穴火口周辺の一部地熱域で縮小が認められています。

5月14日及び11月12日に実施した現地調査では、噴気・地熱域の状況に大きな変化は認められませんでした。

2月12日に陸上自衛隊東北方面隊の協力により実施した上空からの観測では、大穴火口周辺で熱活動が継続していることを確認しましたが、これまでの観測と比較して大きな変化は認められませんでした。また大穴火口北西の地熱域では、噴気の勢いは弱まっているものの継続していました。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページで閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省東北地方整備局、国土地理院、東北大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

本資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の「数値地図 50mメッシュ（標高）」及び「電子地形図（タイトル）」を使用しています。

・火山ガスの状況（図1-③、図19）

大穴火口の北西に設置している火山ガス観測装置による観測では、2023 年以降高い値で推移していた  $\text{SO}_2$ （二酸化硫黄）と  $\text{H}_2\text{S}$ （硫化水素）の濃度比<sup>※3</sup>は、2024 年 11 月以降は概ね静穏期の水準の値で経過しています。

※3 噴気中の各種火山ガスは地下のマグマに由来するものであり、その濃度や成分毎の比率（濃度比）の変化は、火山の活動状態の指標のひとつと考えられています。

・全磁力変化の状況（図20～22）

大穴火口周辺に設置している全磁力連続観測装置による観測では、2021 年 12 月から継続していた大穴火口周辺地下での温度上昇を示唆する全磁力値の変化は、2023 年 9 月頃から鈍化し、現在は概ね停滞しています。

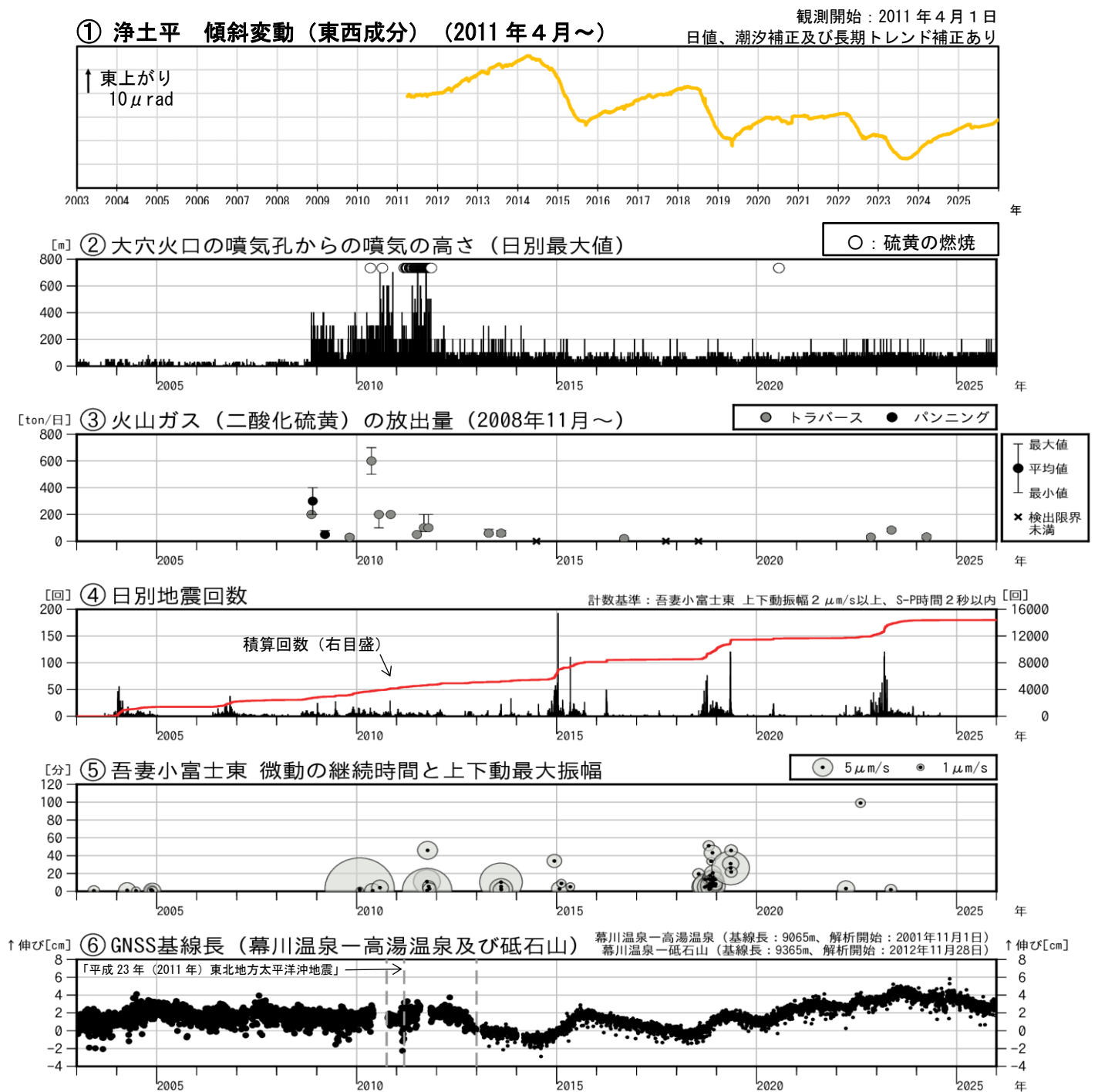


図1 吾妻山 中期的な火山活動の経過（2003年1月～2025年12月）

- ・⑥は図4のGNSS基線③に対応しています。
- ・⑥「平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震」に伴うステップを補正しています。
- ・⑥高湯温泉観測点は約300m東に位置する砥石山観測点に移設しました。
- ・⑥GNSS基線長は2010年10月及び2013年1月に解析方法を変更しています。
- ・⑥システム更新に伴う調整中のため、一部の過去データにステップ状の変化がみられています。

2003年以降、吾妻山深部及び大穴火口浅部の膨張を示す地殻変動や地震活動の活発化を繰り返しています。2008年から2011年にかけては、噴気・地熱活動が活発な状況でした。

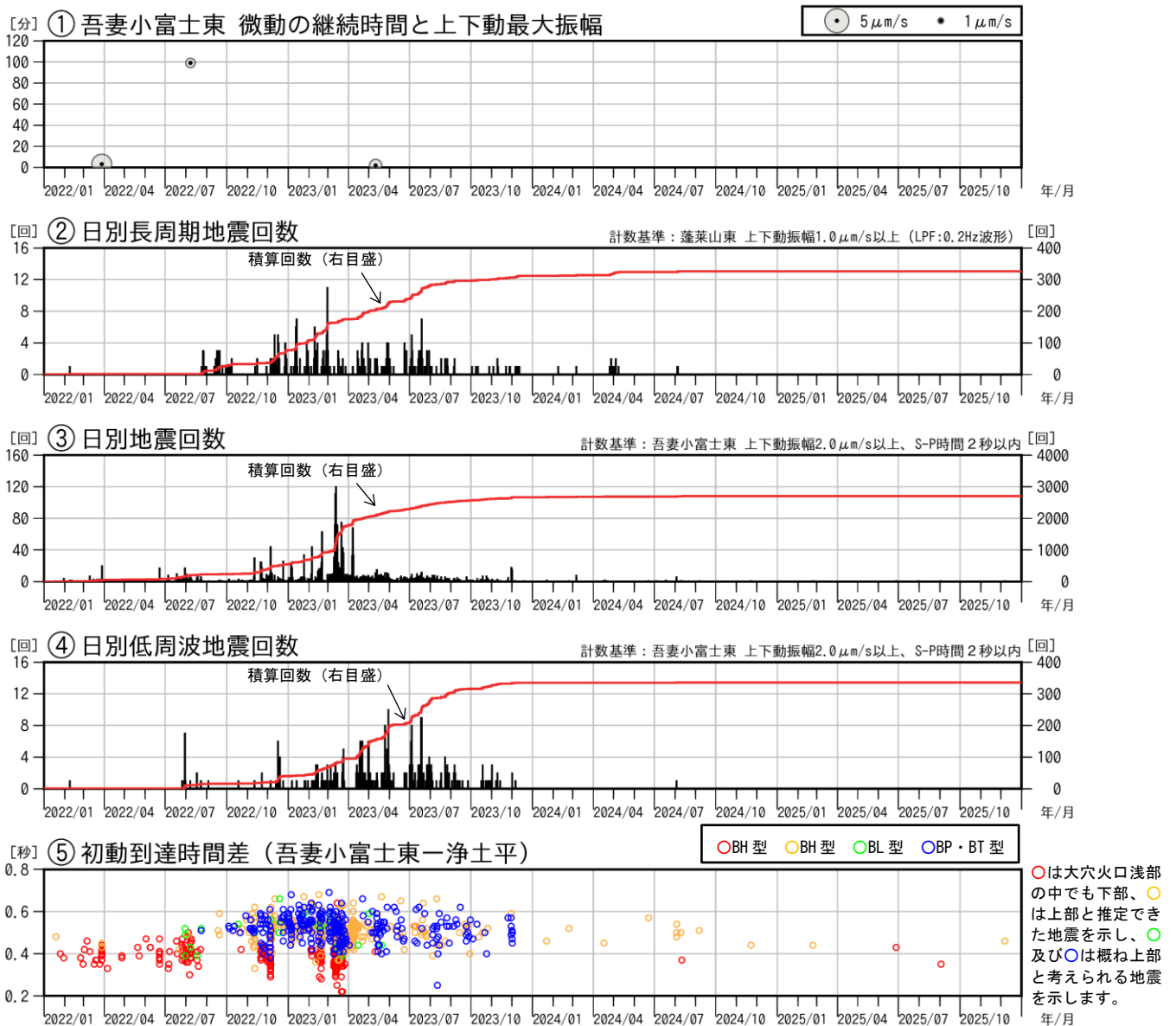


図2 吾妻山 地震活動経過図（2022年1月～2025年12月）

・③日別地震回数に②長周期地震の回数は含まれていません。

火山性地震は少ない状態で経過しました。火山性微動及び長周期地震は観測されませんでした。

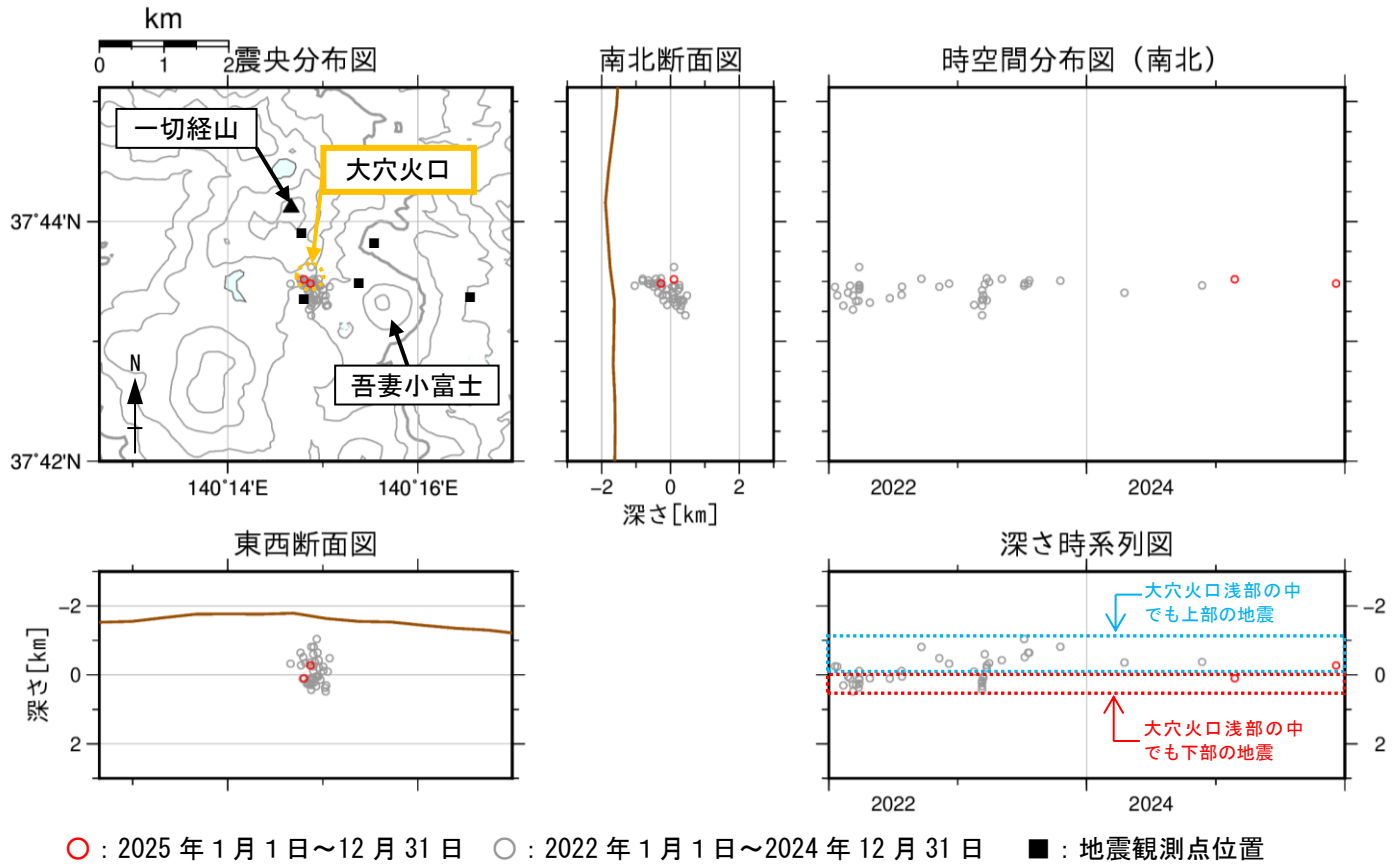


図3 吾妻山 地震活動 (2022 年 1 月～2025 年 12 月)

火山性地震は少ない状態で経過しました。これまでの発生領域と大きな変化はありませんでした。

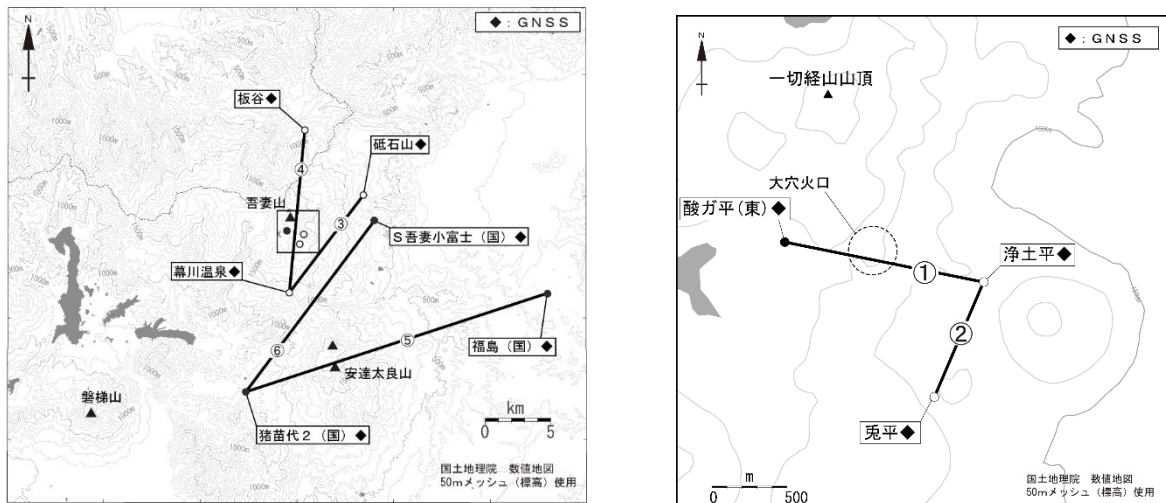


図4 吾妻山 GNSS 観測基線図

白丸(○)は気象庁、黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
左図の四角囲みは右図の表示範囲を示しています。(国)：国土地理院 (東)：東北大学

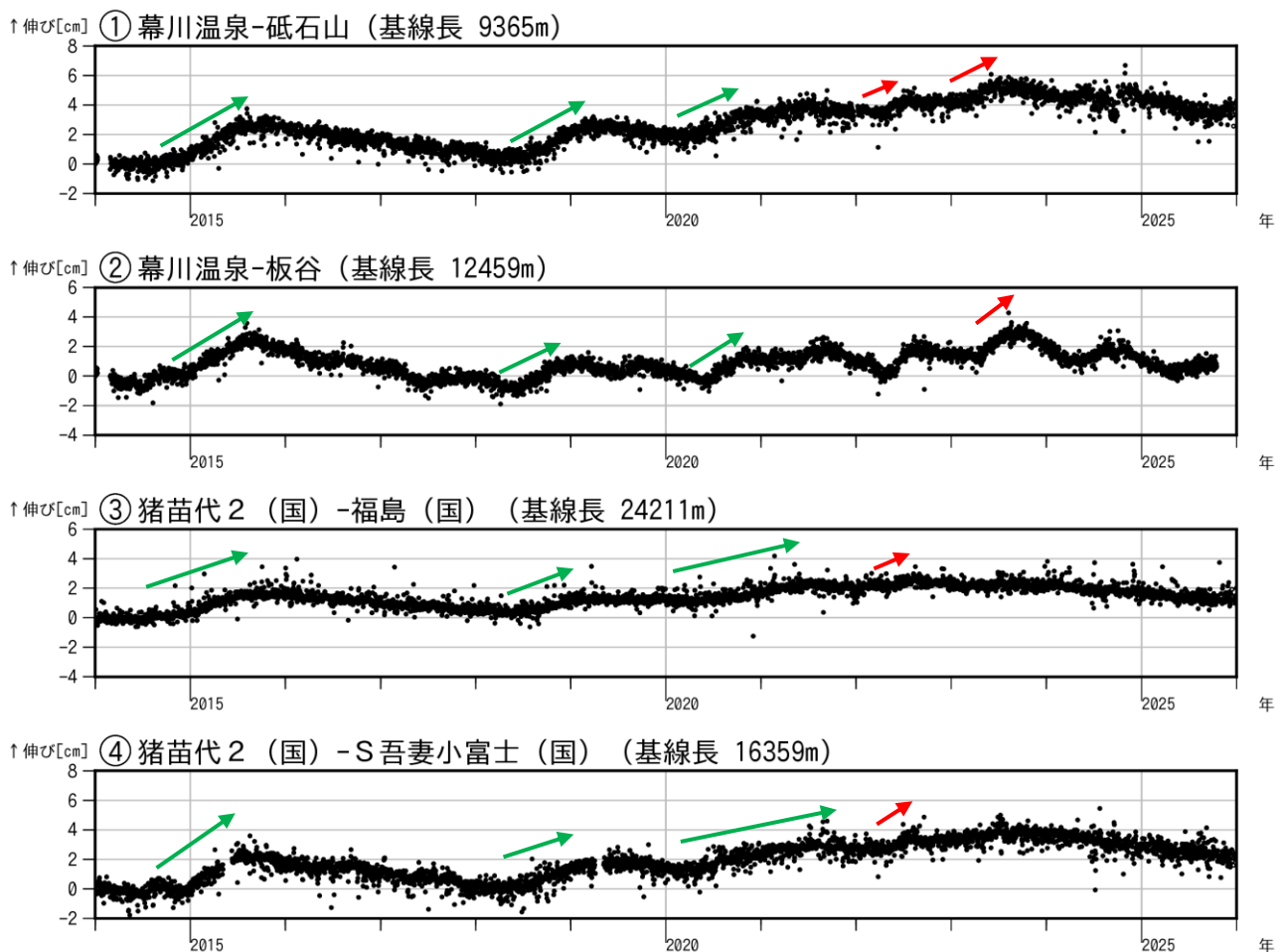


図5 吾妻山 吾妻山深部の地殻変動(2014年1月～2025年12月)

- ①～④は図4のGNSS基線③～⑥に対応しています。
- 空白部分は欠測を示します。
- (国)は国土地理院の観測点を示します。
- 吾妻山周辺の長い基線では、過去吾妻山深部での火山活動に伴う変化(緑矢印)が観測されていました。
- システム更新に伴う調整のため、一部の過去データにステップ状の変化がみられています。

吾妻山周辺の長いGNSS基線では、2022年5月頃から2023年6月頃にかけてわずかな伸びの変化(赤矢印)が観測されていましたが、2023年7月以降は停滞しています。

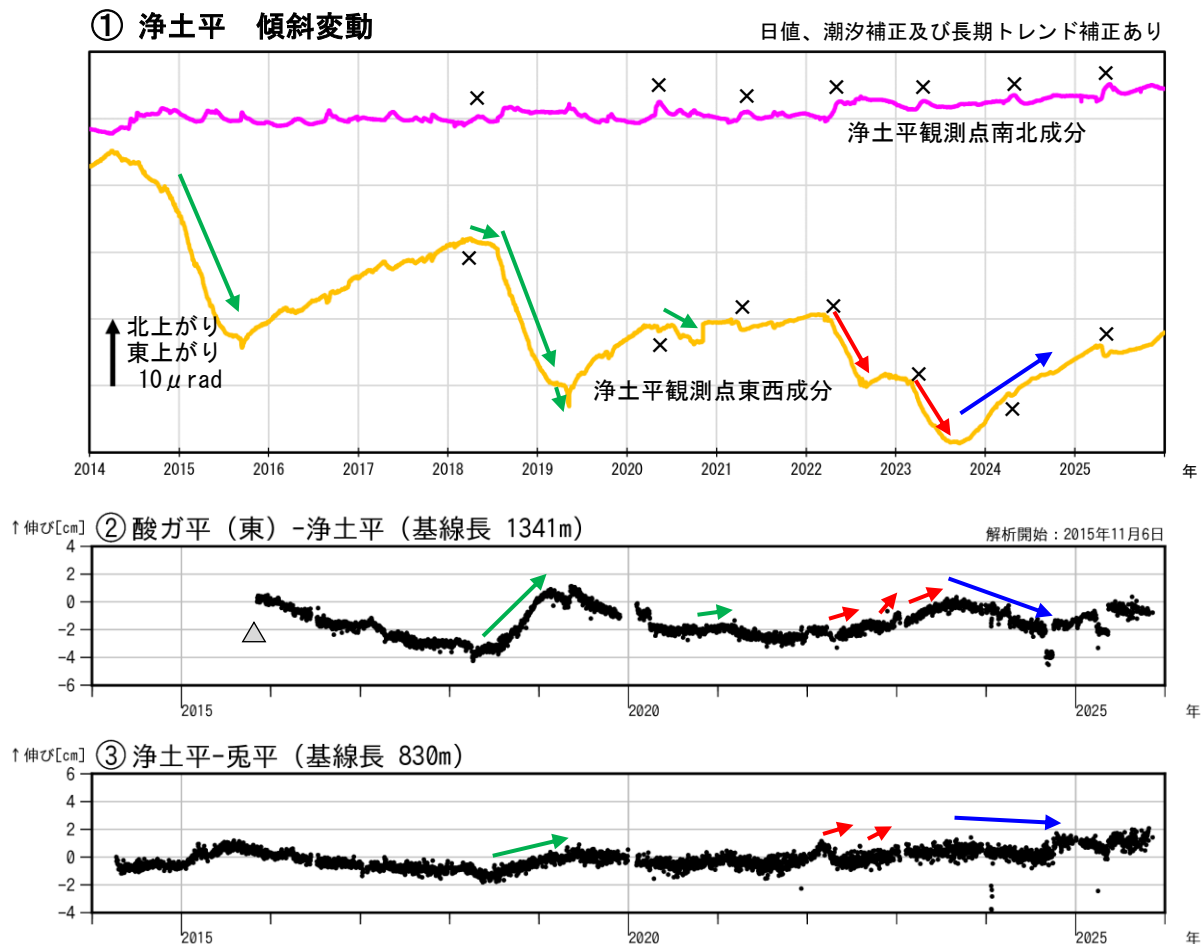


図6 吾妻山 吾妻山浅部の地殻変動（2014年1月～2025年12月）

- ・①×：融雪期には北西上がりの変動がみられます。
- ・②③はそれぞれ図4のGNSS基線①②に対応しています。
- ・空白部分は欠測を示します。
- ・（東）は東北大学の観測点を示します。
- ▼：解析開始を示します。
- ×：積雪等に起因すると考えられる変化で、火山活動によるものではないと考えられます。
- ・大穴火口周辺の短い基線では、過去大穴火口浅部での火山活動に伴う変化（緑矢印）が観測されていました。
- ・②③システム更新に伴う調整中のため、一部の過去データにステップ状の変化がみられています。

浄土平観測点（大穴火口から東南東約1km）に設置している傾斜計（①）では、2022年5月から2023年7月頃にかけて、大穴火口（西）方向の隆起を示す緩やかな変化が繰り返しみられていましたが（赤矢印）、2023年9月下旬からは大穴火口方向の沈降を示す変化となり（青矢印）、2025年5月中旬以降、概ね停滞しています。

GNSS連続観測の大穴火口周辺の短い基線（②③）では、2022年5月頃から2023年5月頃にかけて火山活動の可能性のある伸びの変化（赤矢印）が繰り返し認められていましたが、2023年9月からは縮みの変化となっています（青矢印）。

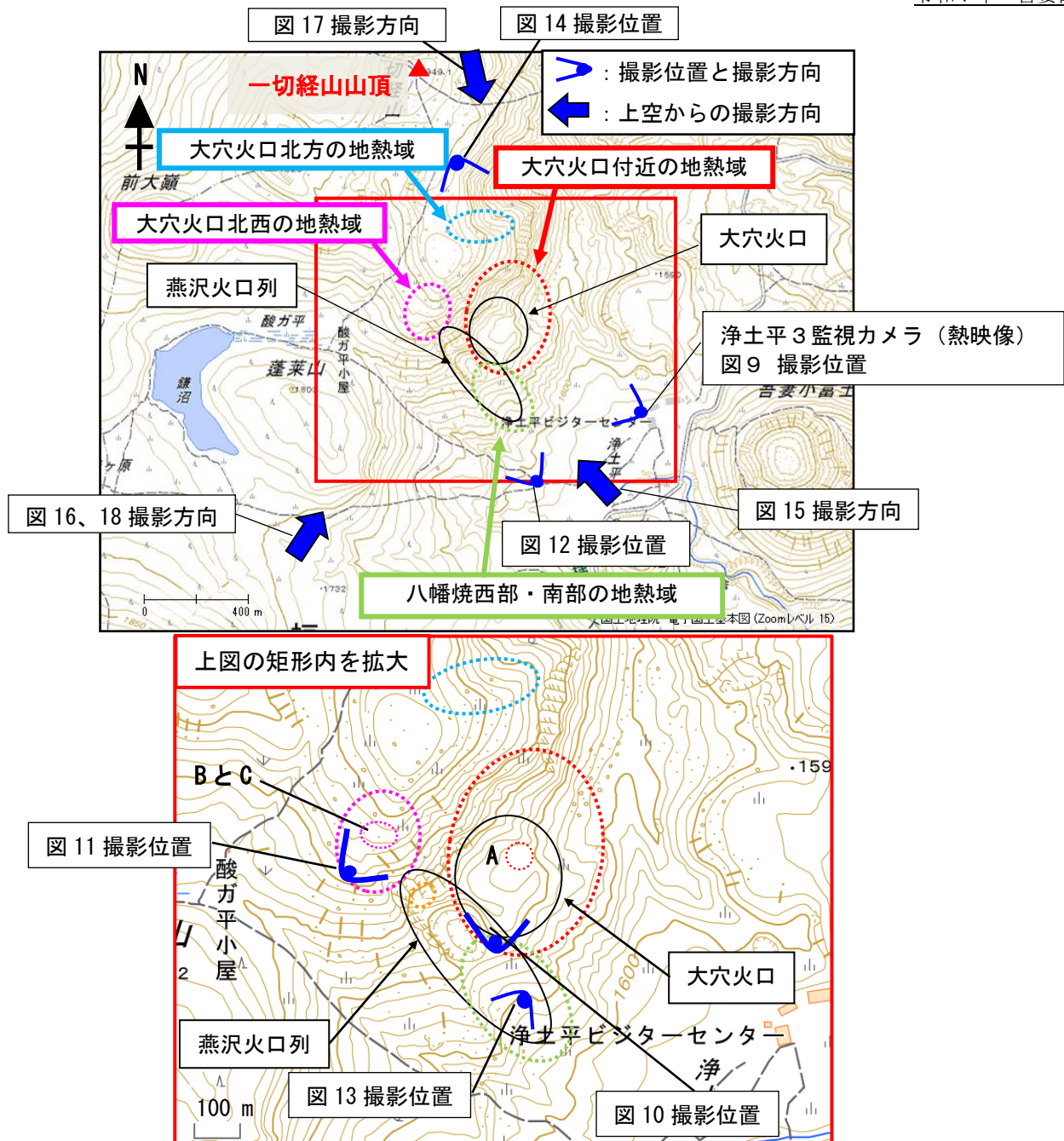


図7 吾妻山 大穴火口周辺の噴気と地熱域の分布等撮影位置、撮影方向



図8 吾妻山 大穴火口周辺の噴気の状態（11月12日）

- ・左図：東北地方整備局が設置している浄土平監視カメラ（大穴火口の東南東約500m）の映像です。
- ・右図：上野寺監視カメラ（大穴火口から東北東約14km）の映像です。

上野寺監視カメラによる観測では、大穴火口の噴気の高さは一時的に200mを観測しましたが、その他の期間は100m以下で経過しました。浄土平監視カメラ（東北地方整備局）による観測も含め、大穴火口及びその周辺の噴気の状態に変化は認められません。

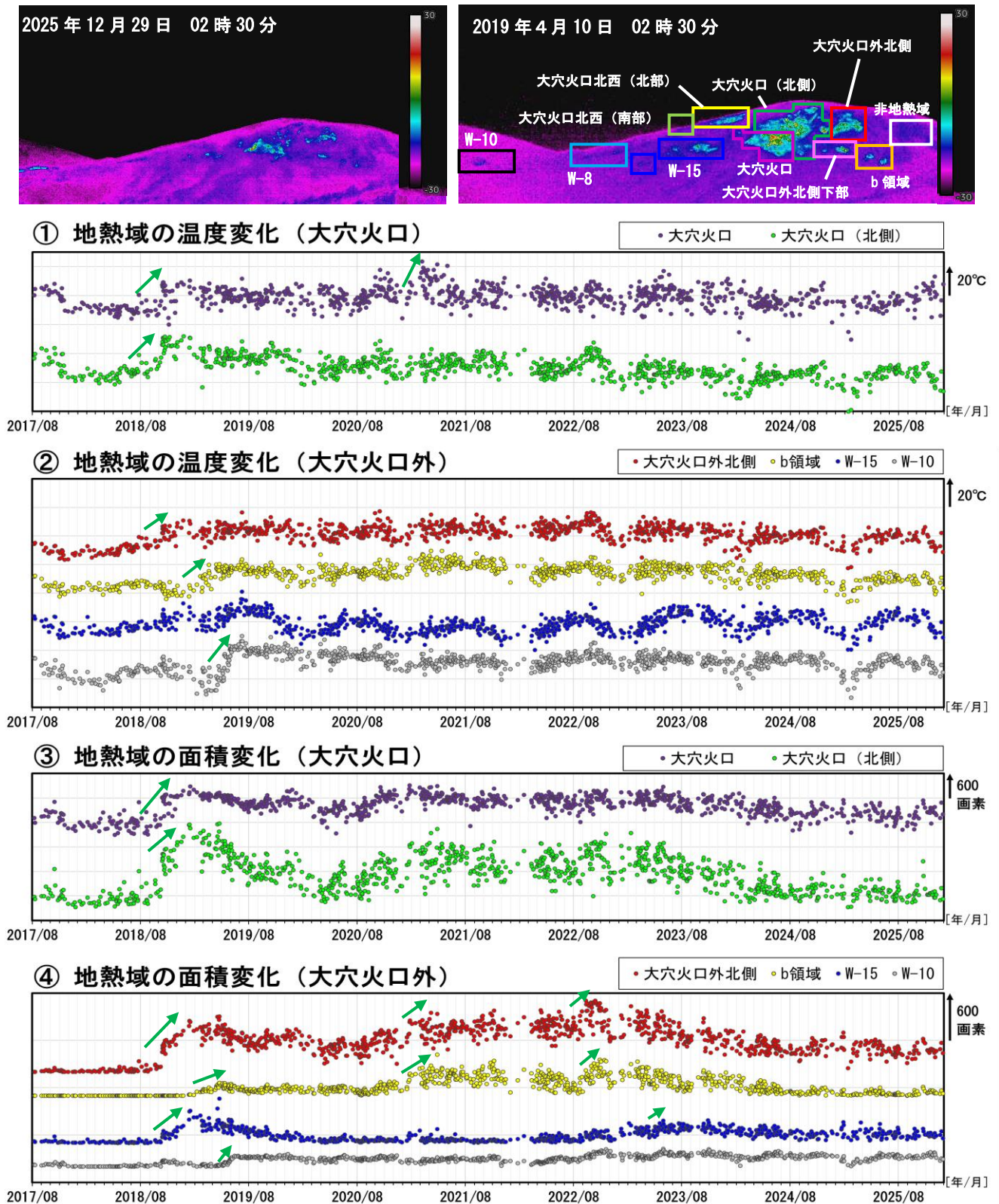


図9 吾妻山 監視カメラによる大穴火口周辺の地熱域の経過（2017年8月～2025年12月）

- ・①～②は各領域の最高温度と吾妻山の南約6kmのアメダス鷲倉の気温との差を示しています。
- ・③～④は領域毎に非地熱域（白枠）の平均温度より5℃以上高い領域の画素数を示しています。数値が大きくなるほど、地熱域の面積が拡大していることを示します。
- ・空白部分は天候不良等による欠測を表しています。
- ・これまでの火山活動活発化の際には、地熱域の面積拡大や温度上昇がみられました（緑矢印）。

大穴火口周辺の地熱域に特段の変化は認められませんでした。

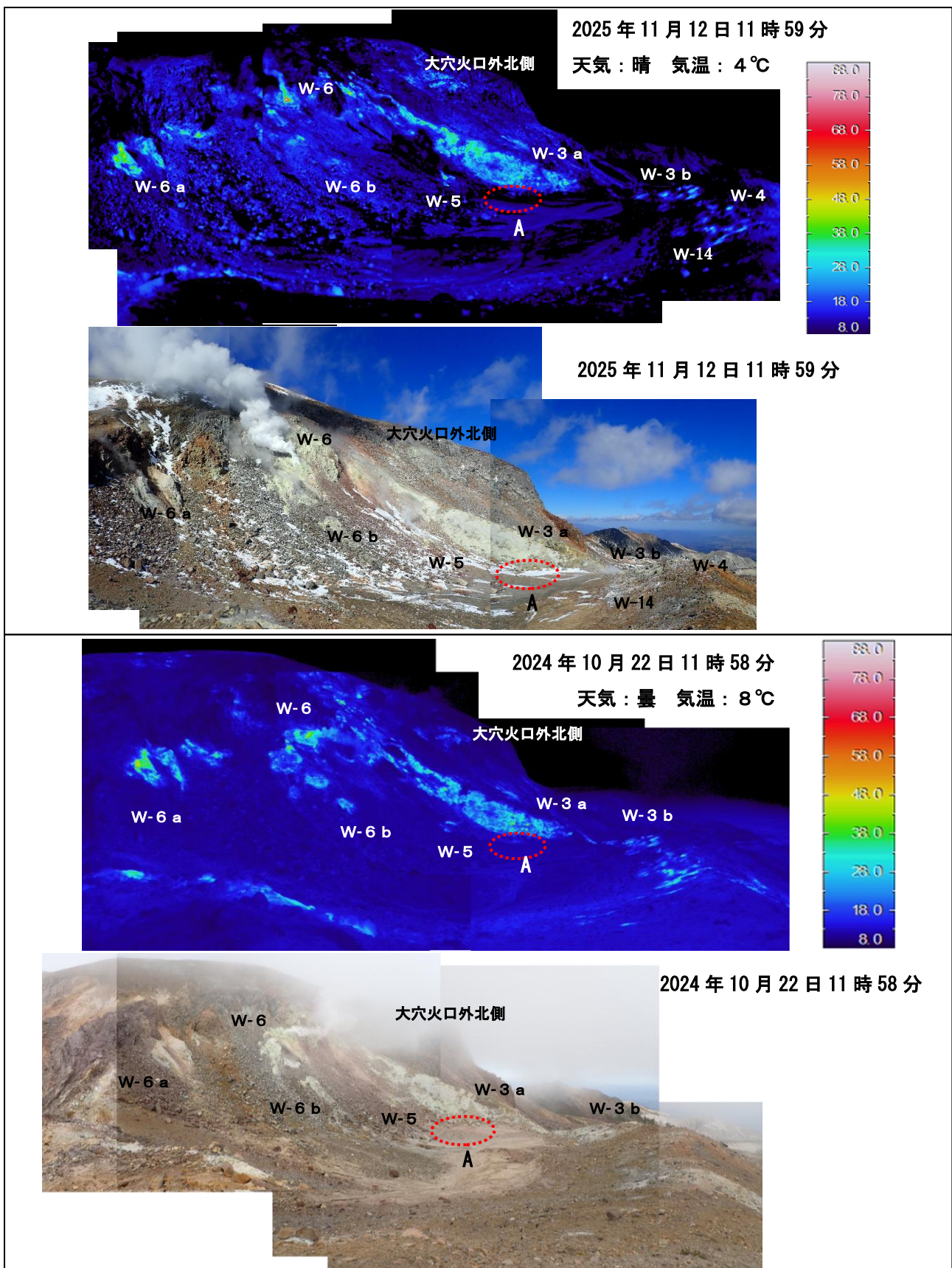


図 10 吾妻山 大穴火口付近及びその周辺の状況（下）と地表面温度分布（上）

- ・ 図中の破線の色は、図 7 の破線の色に対応します。
  - ・ 噴気や雲のため、一部の地熱域が隠れています。
- ※日射の影響により、裸地等では表面温度が高めに表示されています。

11 月 12 日に実施した現地調査では、前回（2024 年 10 月 22 日）と比較して噴気・地熱域の状況に大きな変化は認められませんでした。なお 11 月 12 日は、監視カメラによる観測で、大穴火口の噴気の高さが一時的に 200m を観測しています。

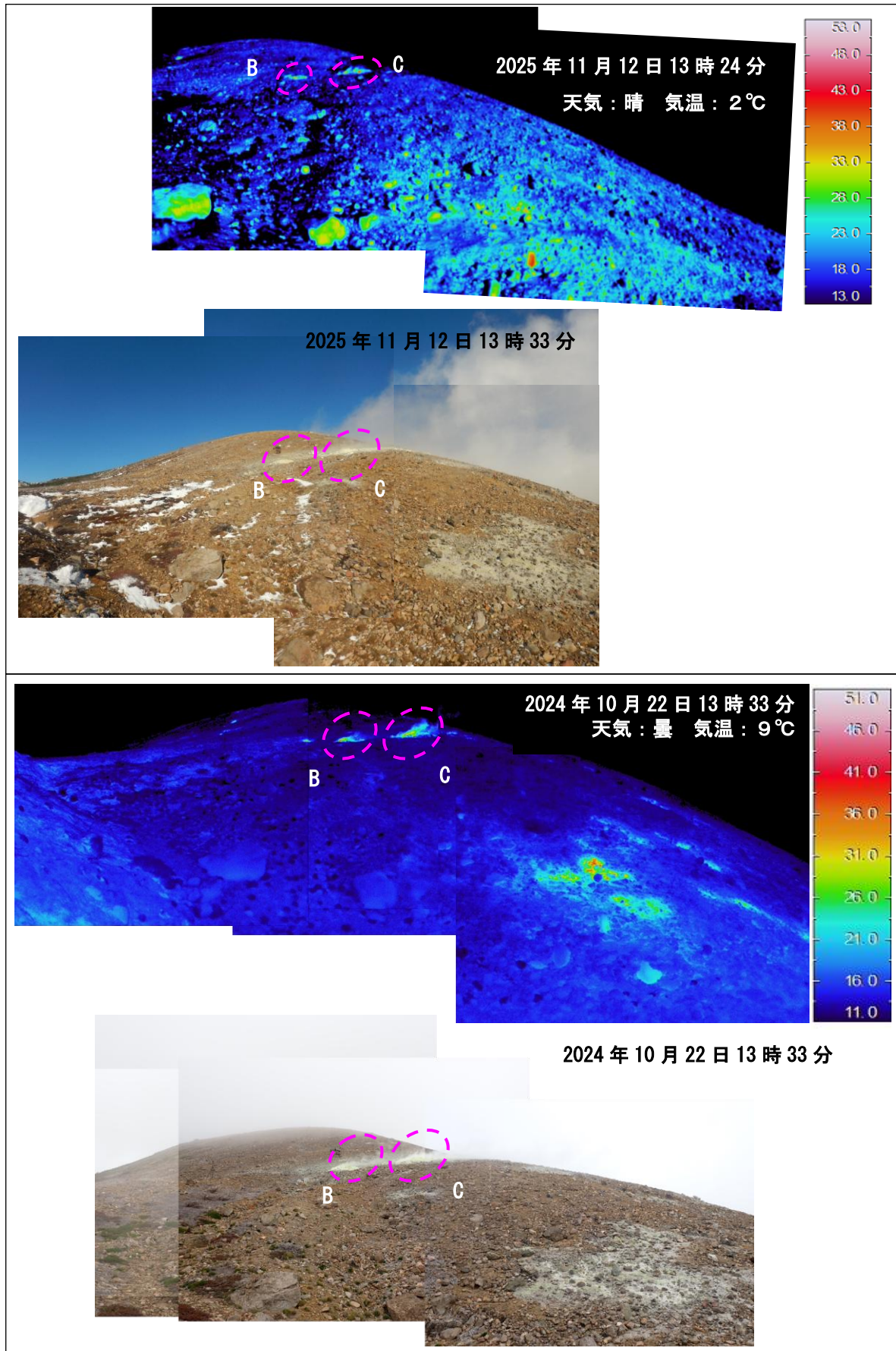


図 11 吾妻山 大穴火口北西の状況（下）と地表面温度分布（上）

・図中の B、C の場所は、図 7 下の B、C の場所に対応します。  
※日射の影響により、裸地等では表面温度が高めに表示されています。

11月12日に実施した現地調査では、前回（2024年10月22日）と比較して、地熱域と周囲との温度差が小さくなったことを確認しました。日射の影響が考えられますが、地熱域の範囲が不明瞭になった可能性もあります。噴気の状態には大きな変化は認められませんでした。

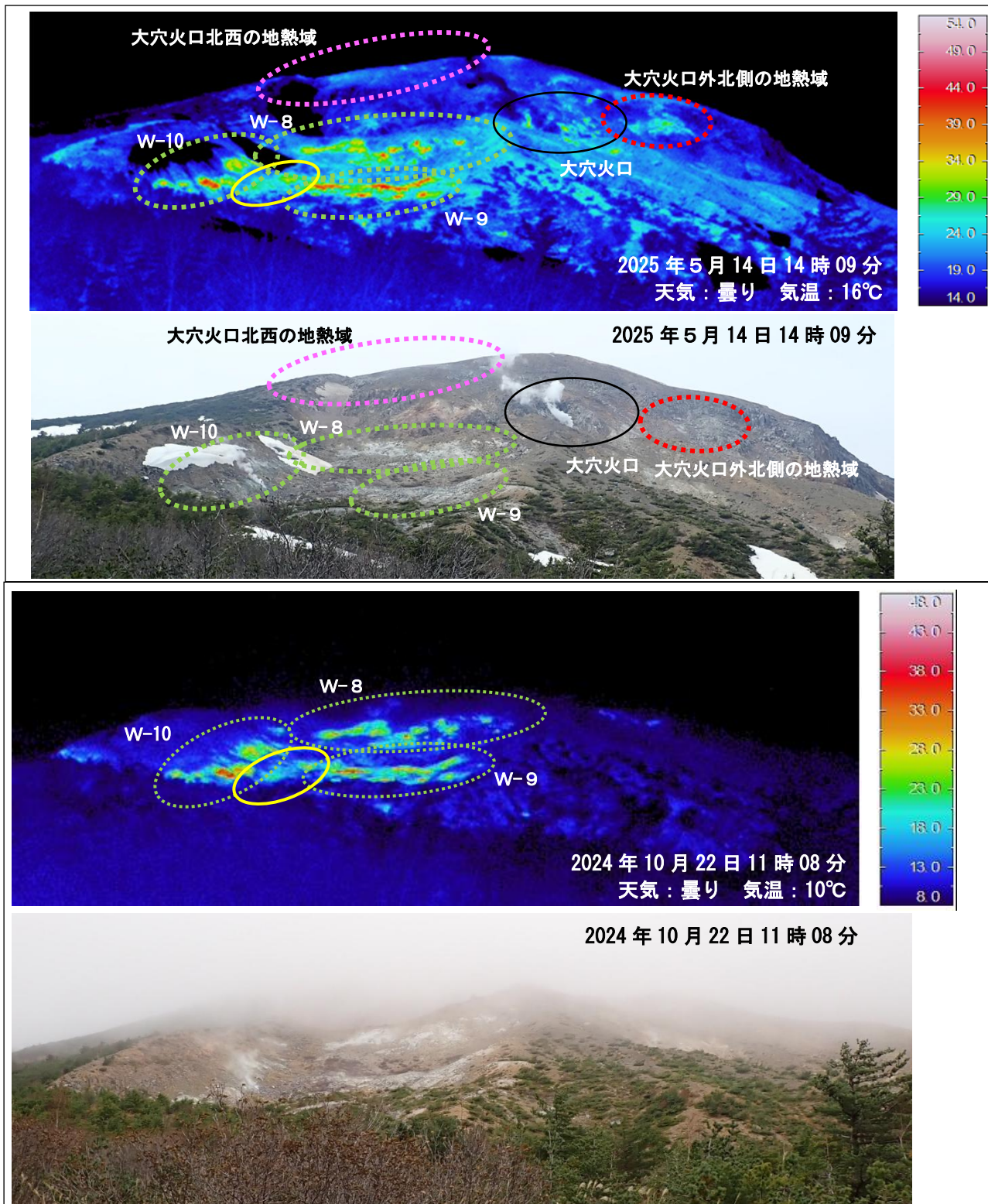


図12 吾妻山 八幡焼周辺の状態（下）と地表面温度分布（上）

- ・図中の破線の色は、図7の破線の色に対応します。
- ・噴気や雲のため、一部の地熱域が隠れています。
- ※日射の影響により、裸地等では表面温度が高めに表示されています。

5月14日に実施した現地調査では、前回（2024年10月22日）と比較して、噴気・地熱域の状況に大きな変化は認められませんでした。わずかな拡大が認められているW-9とW-10との間の地熱域（黄枠内）では、引き続き地熱域が認められました。

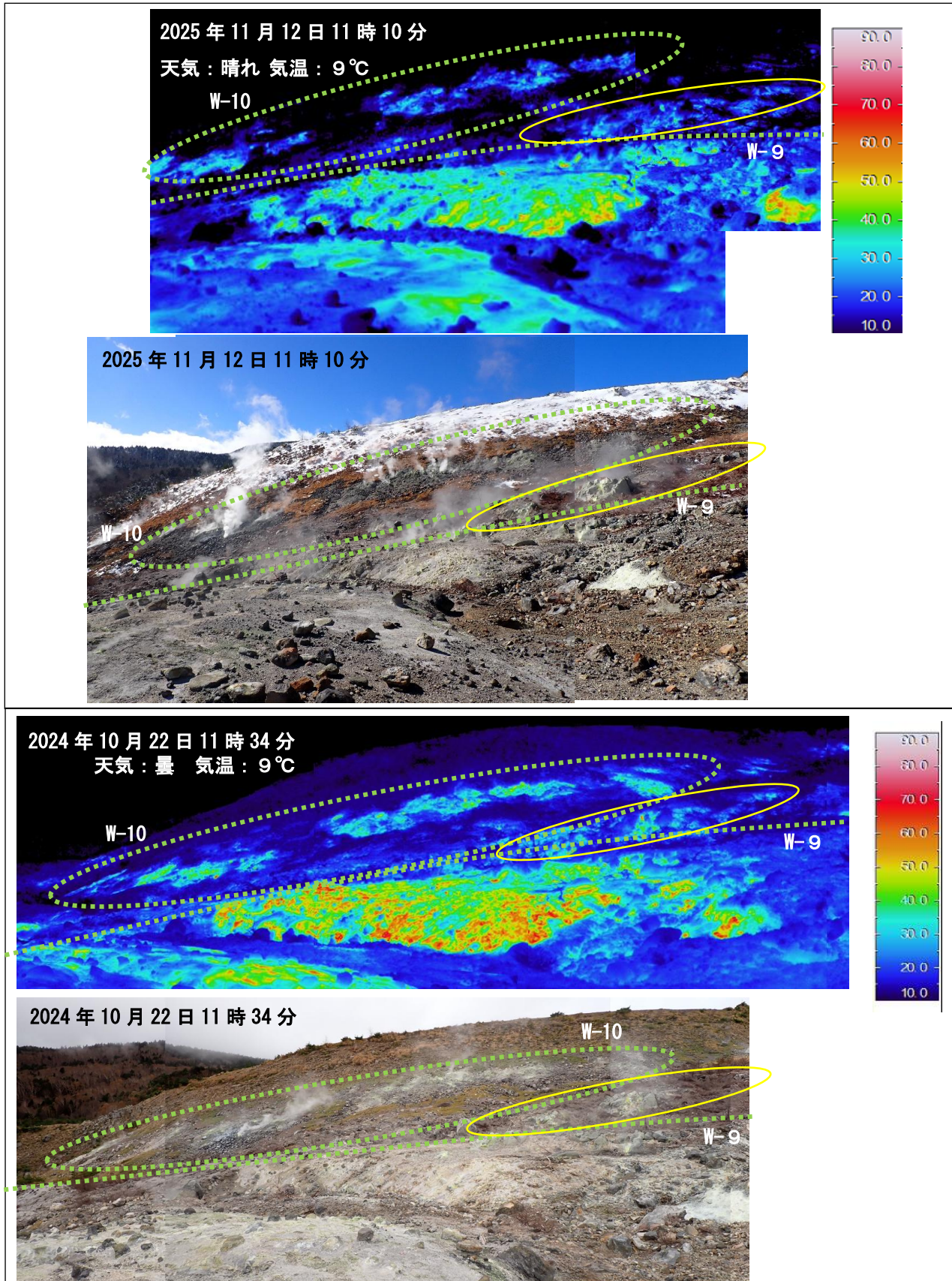


図 13 吾妻山 八幡焼の状況（下）と地表面温度分布（上）

・図中の破線の色は、図7の破線の色に対応します。

※日射の影響により、裸地等では表面温度が高めに表示されています。

11 月 12 日に実施した現地調査では、前回（2024 年 10 月 22 日）と比較して噴気・地熱域の状況に大きな変化は認められませんでした。わずかな拡大が認められているW-9 とW-10 との間の地熱域（黄枠内）では、引き続き地熱域が認められました。

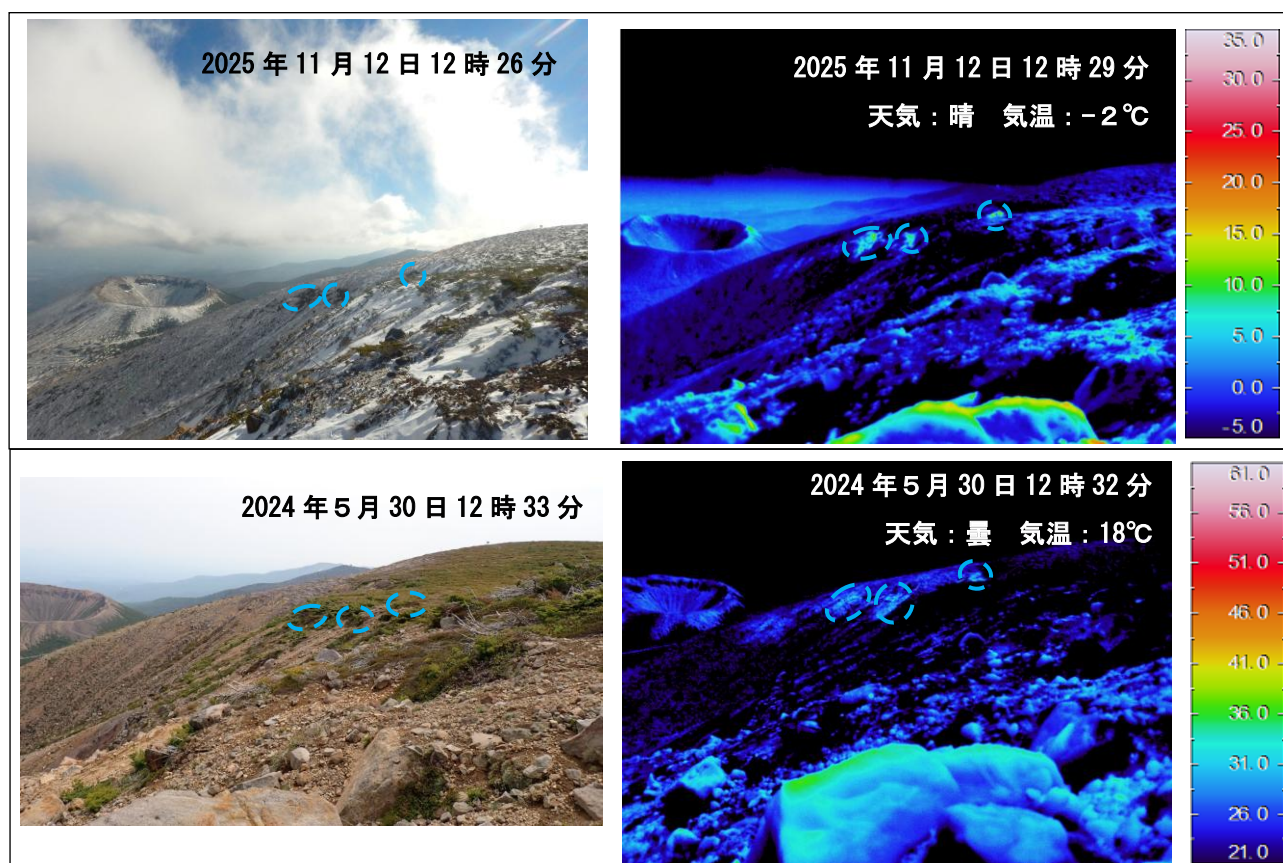


図 14 吾妻山 大穴火口北方周辺の状況（左）と地表面温度分布（右）

- ・ 図中の破線の色は、図 7 の破線の色に対応します。
  - ・ 噴気や雲のため、一部の地熱域が隠れています。
- ※日射の影響により、裸地等では表面温度が高めに表示されています。

11 月 12 日に実施した現地調査では、前回（2024 年 5 月 30 日）と比較して、地熱域の状況に大きな変化は認められませんでした。

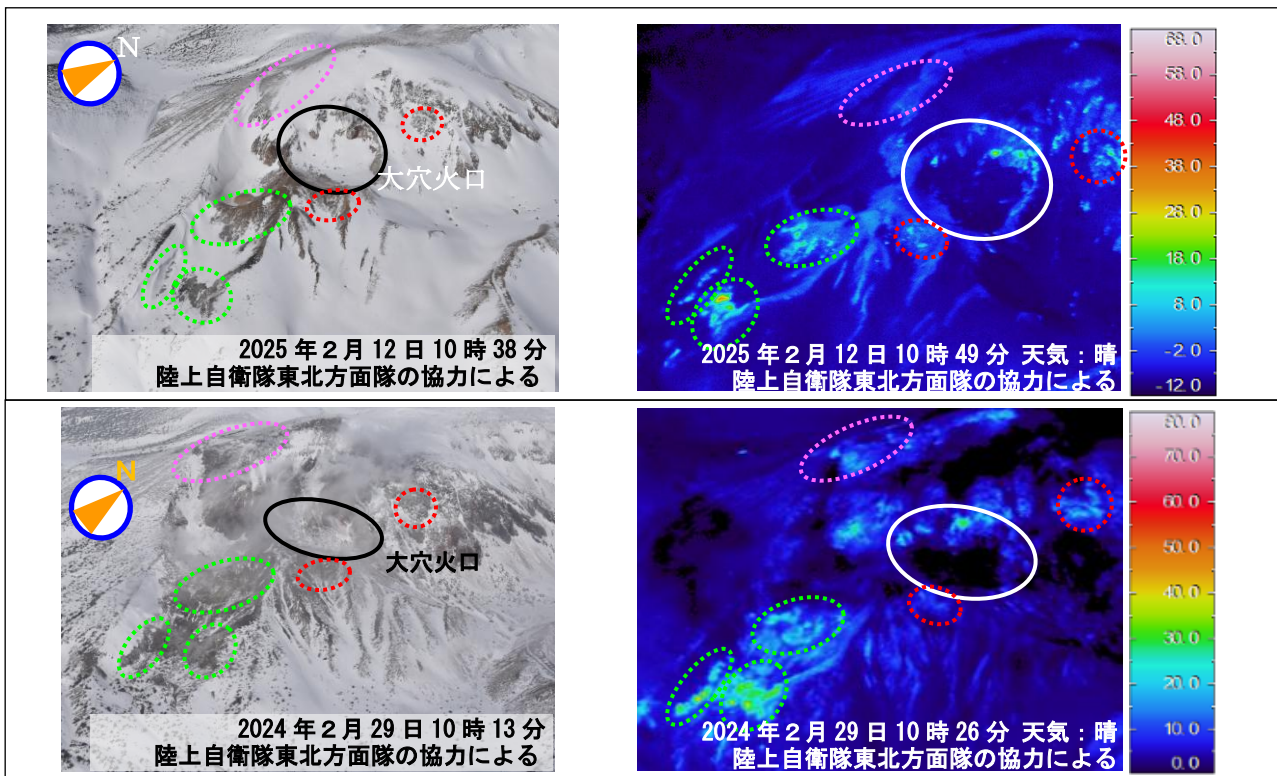


図 15 吾妻山 上空から撮影した大穴火口及びその周辺の状況と地表面温度分布

- ・ 図中の破線の色は、図 7 の破線の色に対応します。
- ※日射の影響により、裸地等では表面温度が高めに表示されています。
- ※噴気や雲のため、一部の地熱域が隠れています。

大穴火口付近とその周辺に大きな変化は認められず、熱活動が継続していることを確認しました。

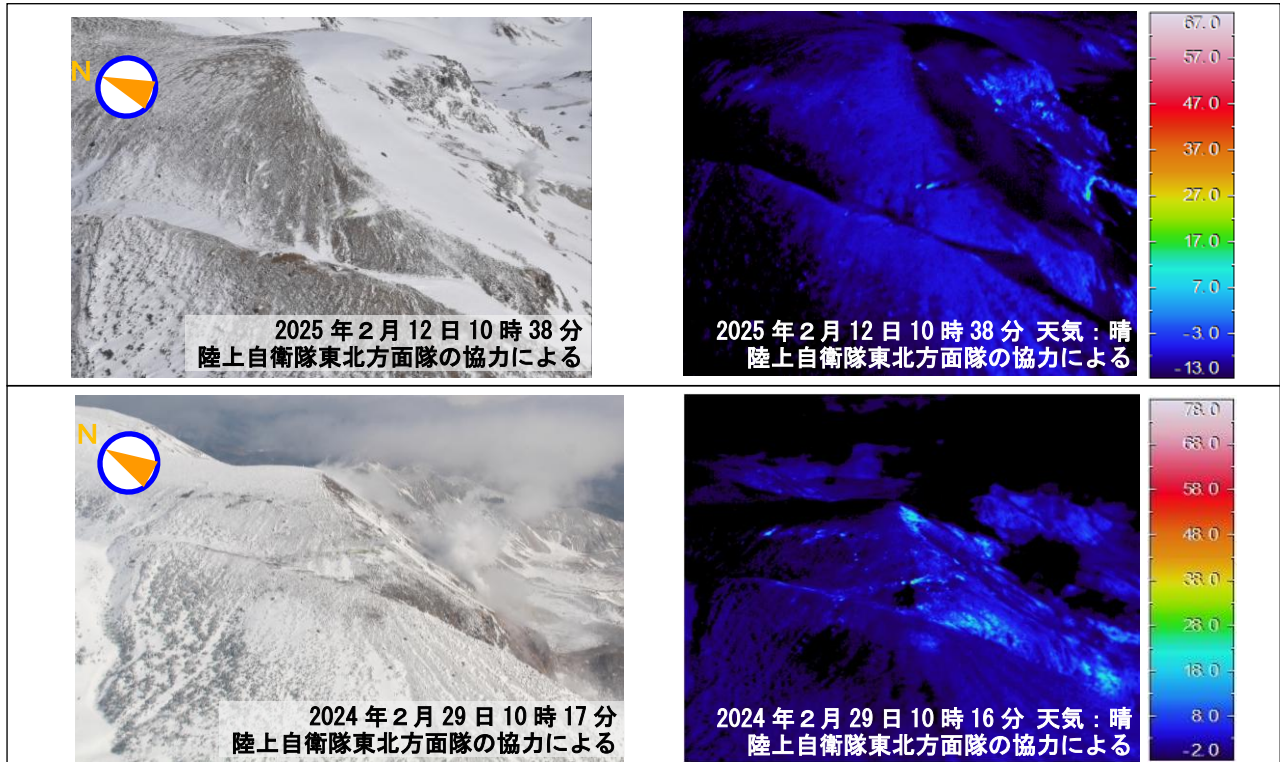


図 16 吾妻山 上空から撮影した大穴火口北西の状況と地表面温度分布

- ※日射の影響により、裸地等では表面温度が高めに表示されています。

大穴火口北西では、噴気・地熱域の状況に大きな変化は認められませんでした。

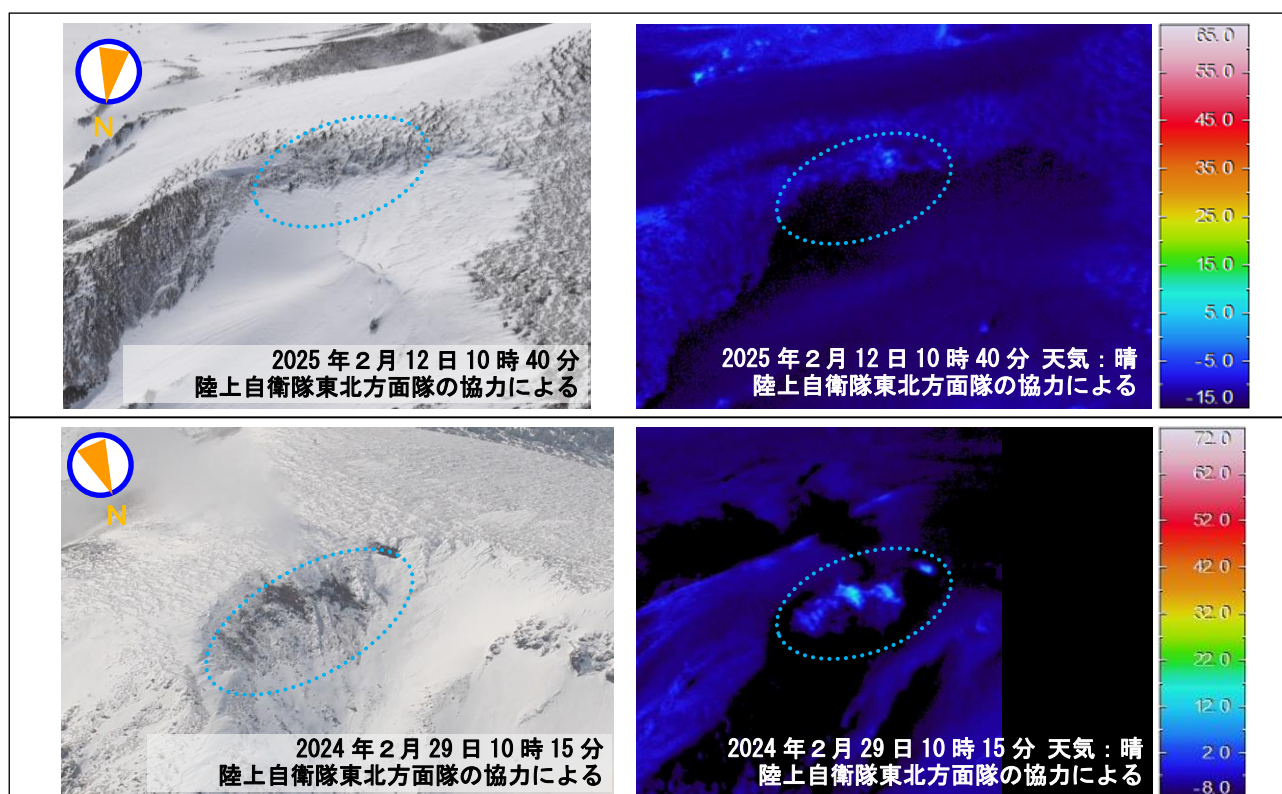


図 17 上空から撮影した大穴火口北方の状況と地表面温度分布

・図中の破線の色は、図 7 の破線の色に対応します。

※日射の影響により、裸地等では表面温度が高めに表示されています。

大穴火口北方では、地熱域と考えられる領域（水色破線内）が、前回（2024 年 2 月 29 日）と比べて狭くなっています。

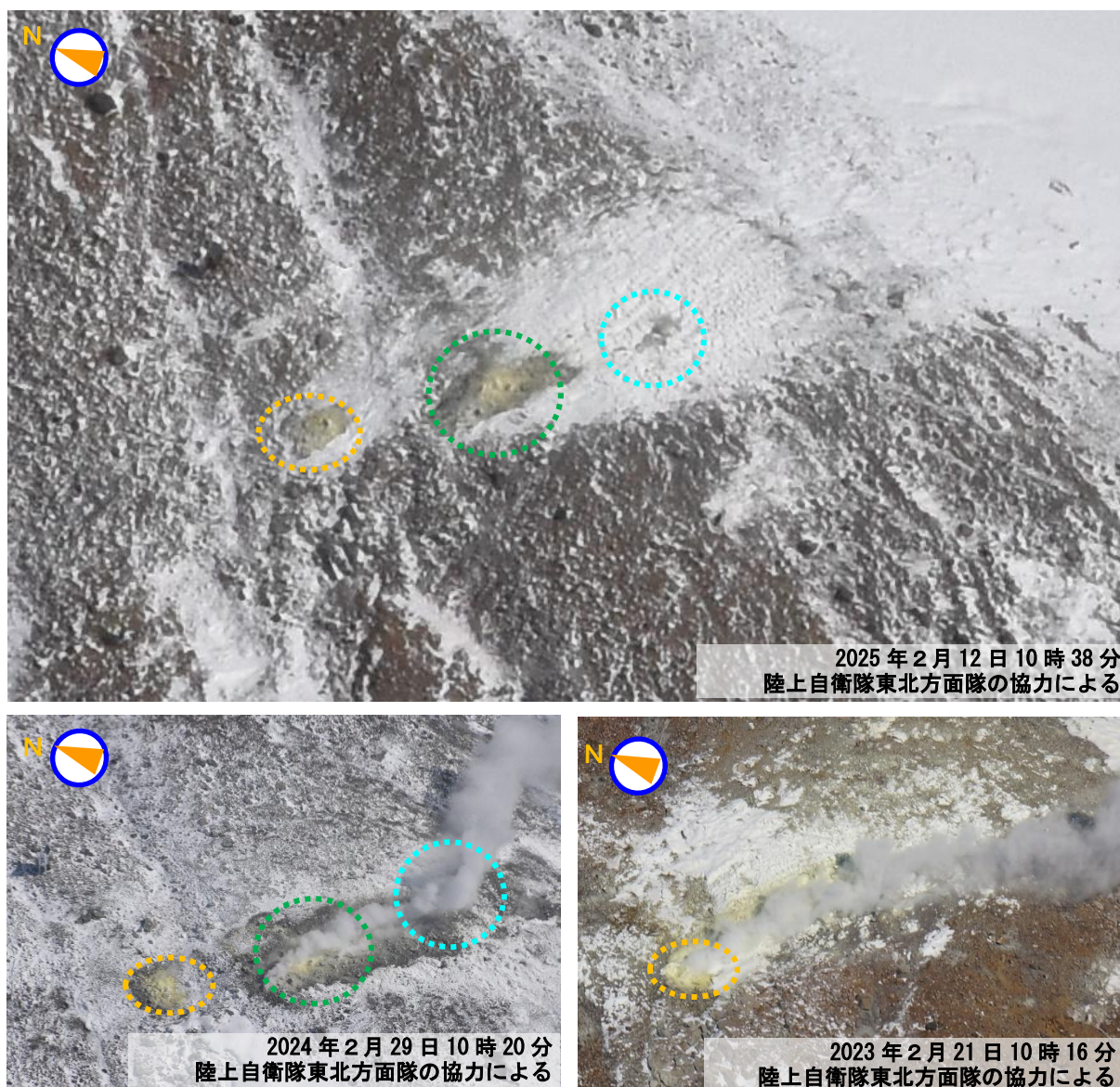


図 18 上空から撮影した大穴火口北西の噴気の状況

大穴火口北西の地熱域では、前回（2024 年 2 月 29 日）の観測で顕在化が認められた噴気（緑色破線内）は勢いが弱まっているものの継続していることを確認しました。2023 年 2 月 21 日の観測まで確認されていた噴気（橙破線内）は前回と同様、肉眼では確認できませんでした。また前回の観測で確認された水色破線内の噴気は今回、肉眼では確認できませんでした。

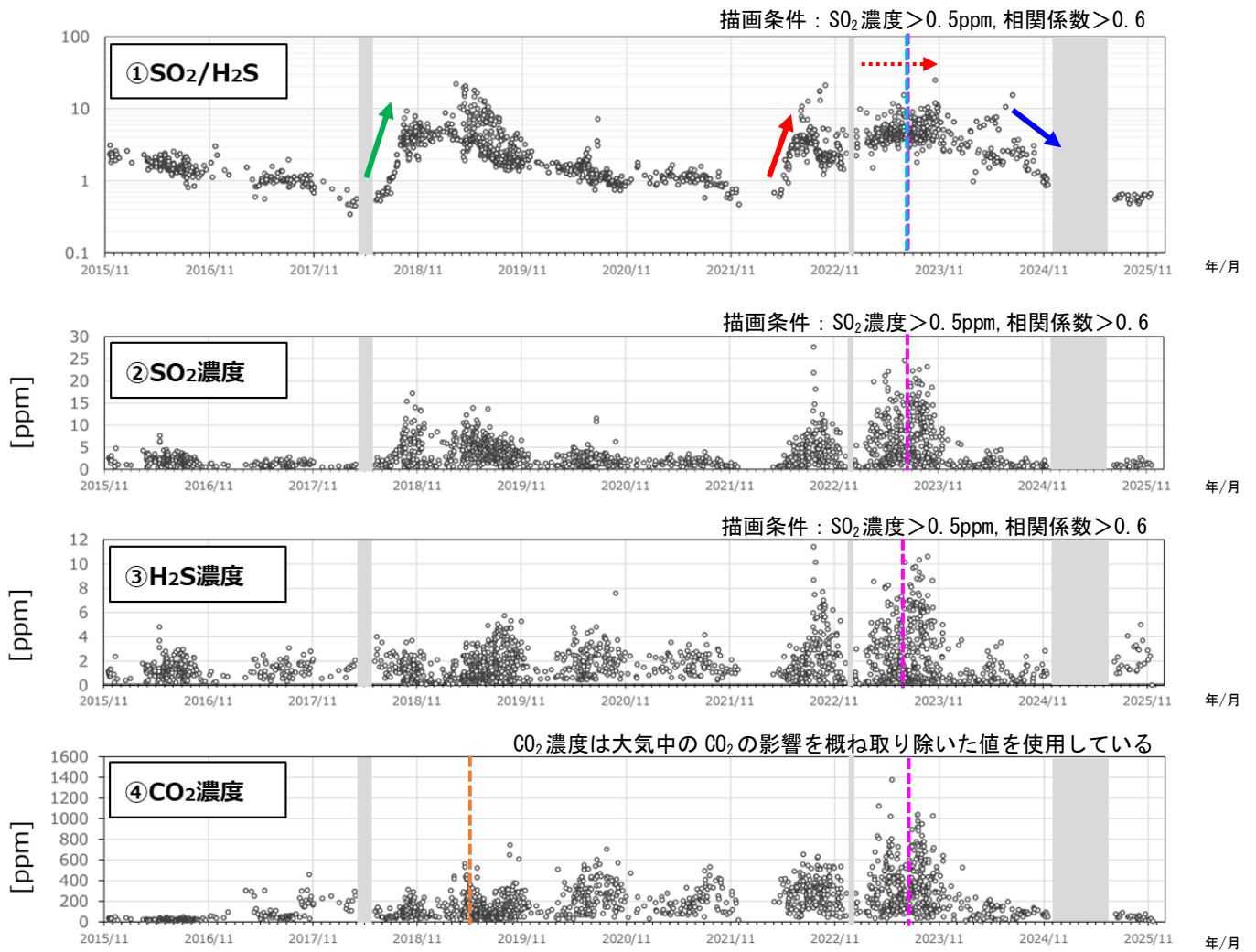


図 19 吾妻山 火山ガス観測装置による観測（2015 年 11 月～2025 年 12 月）

- ・火山ガス観測装置では、噴気孔から流れてくる火山ガスと周辺大気の混合気体を測定しているため、測定される濃度は、風向きや大気との混合の影響を受けて増減する場合があります。一方、複数の火山ガスの濃度比はこうした影響を受けにくいいため、火山活動評価の指標として利用しています。
- ・水色破線は火山ガス観測装置のセンサー交換を示し、それ以降のデータは感度補正を行っていません。水色破線以前のデータは感度補正済みです。
- ・桃色破線は臨時観測を行う火山ガス濃度の閾値変更を示し、それ以降臨時観測を行う頻度が低下している可能性があります。火山ガス観測装置では、毎日 13 時に定時観測を行う他、高濃度の火山ガスを検知した際に臨時観測を行います。
- ・橙色破線は火山ガス観測装置のセンサー交換を示し、それ以前は高濃度の  $\text{CO}_2$  を観測できていない可能性があります。
- ・グラフの灰色部分は欠測を表しています。
- ・季節風が強まる冬期には観測点が大穴火口の北西側にある位置関係のため観測データを得にくい状況となります。
- ・ $\text{SO}_2$  と  $\text{H}_2\text{S}$  の濃度比は 2018 年 5 月頃から 9 月にかけて上昇がみられ（緑矢印）、2022 年 5 月頃にも上昇がみられました（赤矢印）。

火山ガス観測装置による観測では、 $\text{SO}_2$  と  $\text{H}_2\text{S}$  の濃度比は、2023 年 2 月以降、2018～2019 年の活動期並みの高い値となっていました（赤破線矢印）。その後、 $\text{SO}_2$  と  $\text{H}_2\text{S}$  の濃度比は次第に低下し（青矢印）、2024 年 11 月以降は概ね静穏期の水準の値に戻っています。

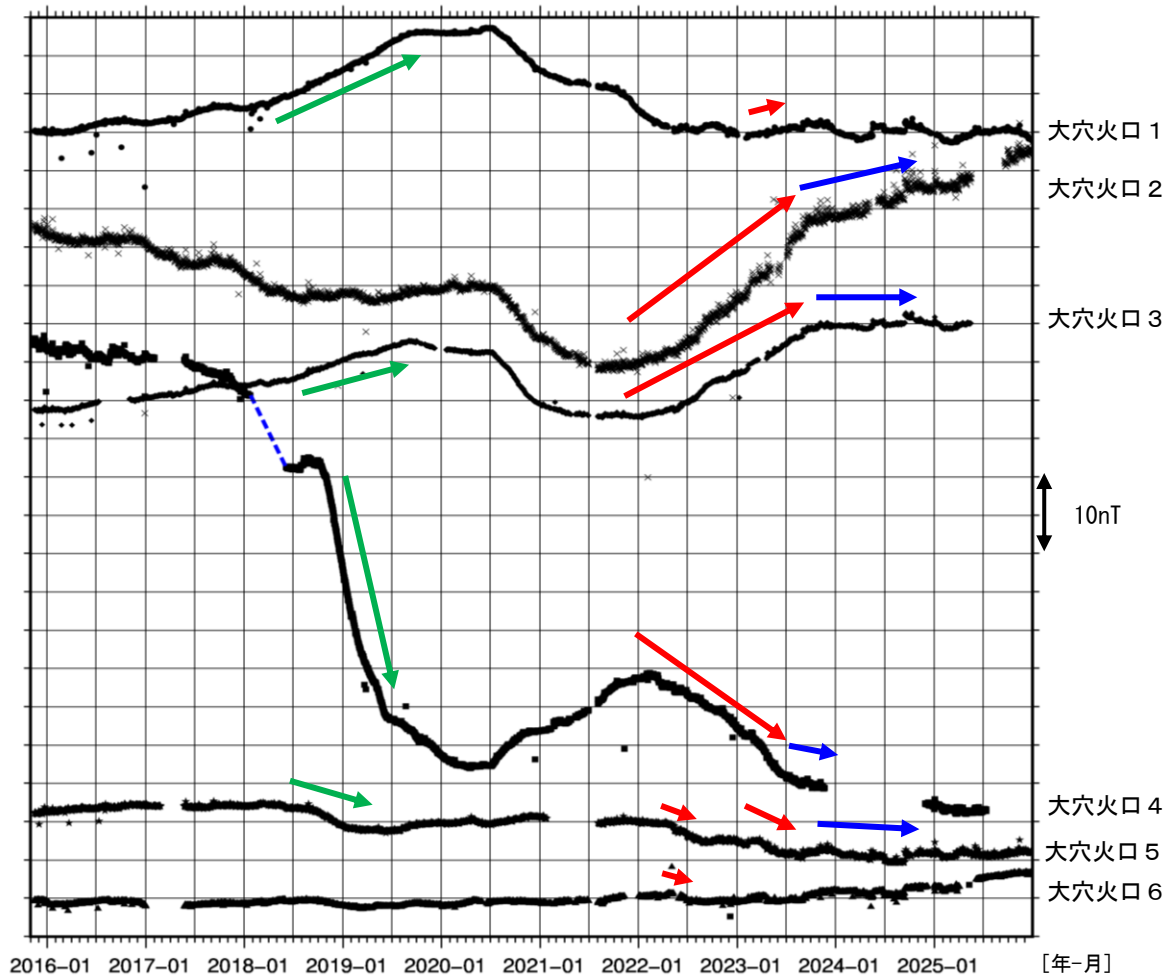


図 20 吾妻山 全磁力連続観測の全磁力値変化（2003 年 9 月～2025 年 12 月）

- ・各観測点の場所は図 21 に示しています。 ・グラフの空白部分は欠測を表しています。
- ・全磁力連続観測のデータは参照点（大穴火口の北東約 6km にある高湯観測点あるいは大穴火口の南東約 16km にある上葉木坂西観測点）で観測された全磁力値を基準とした場合の各日の 00 時 00 分から 02 時 59 分の平均値を示しています。
- ・青破線で示す観測点大穴火口 4 における全磁力変動は、観測機器を再設置したことによる人為的な変動です。
- ・2018 年から 2019 年にかけて、全磁力値の変化がみられました（緑矢印）。この変化は大穴火口北西地下の温度上昇を示すと考えられます。

全磁力連続観測では、2021 年 12 月以降、大穴火口周辺地下の温度上昇を示唆する変化（赤矢印）が認められました。その変化は、2023 年 9 月頃から鈍化し（青矢印）、現在は概ね停滞しています。

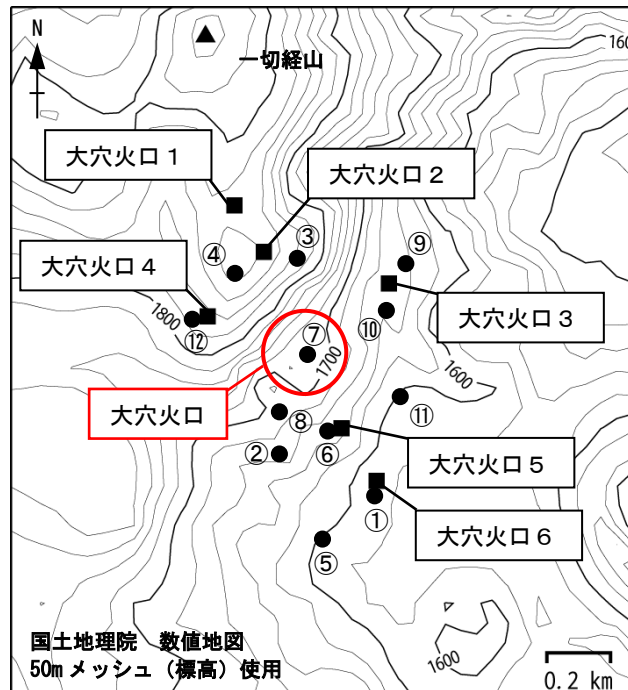


図 21 吾妻山 全磁力観測点配置図

■ : 全磁力連続観測点 (1～6)    ● : 全磁力繰り返し観測点 (①～⑫)

## 【参考】全磁力観測について

火山活動が静穏なときの火山体は地球の磁場（地磁気）の方向と同じ向きに磁化されています。これは、火山を構成する岩石には磁化しやすい鉱物が含まれており、マグマや火山ガス等に熱せられていた山体が冷えていく過程で、地磁気の方に帯磁するためです。しかし、火山活動の活発化に伴い、マグマが地表へ近づくなどの原因で火山体内の温度が上昇するにつれて、周辺の岩石が磁力を失うようになります。これを「熱消磁」と言います。そして地下で熱消磁が発生すると、地表で観測される磁場の強さ（全磁力）が変化します。これらのことから、全磁力観測により火山体内部の温度の様子を知る手がかりを得ることができます。

例えば、火口直下で熱消磁が起きたとすると、火口の南側では全磁力の減少、火口北側では逆に全磁力の増大が観測されます。この変化は、熱消磁された部分に地磁気と逆向きの磁化が生じたと考えerことで説明できます。下図に示すように、火口周辺で観測した全磁力の値は、南側Aでは地磁気と逆向きの磁力線に弱められて小さく、北側Bでは強められて大きくなるのがわかります。

ただし全磁力の変化は、熱消磁によるものだけでなく、地下の圧力変化などによっても生じることがあります。

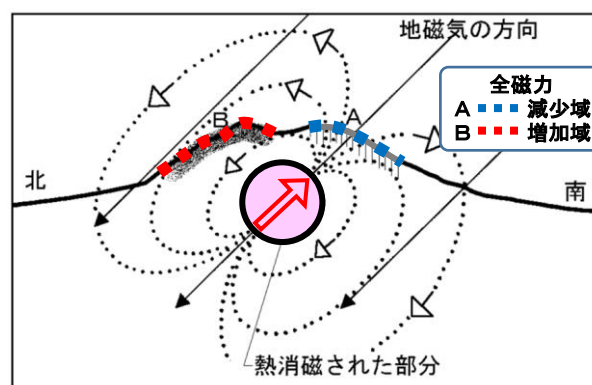


図 22 熱消磁に伴う全磁力変化のモデル

## 火山体周辺の全磁力変化と火山体内部の温度

観測点の全磁力変化	地下の岩石の磁化	火山体内の温度変化
北側で <b>増加</b> 南側で <b>減少</b>	消磁	上昇
北側で <b>減少</b> 南側で <b>増加</b>	帯磁	低下

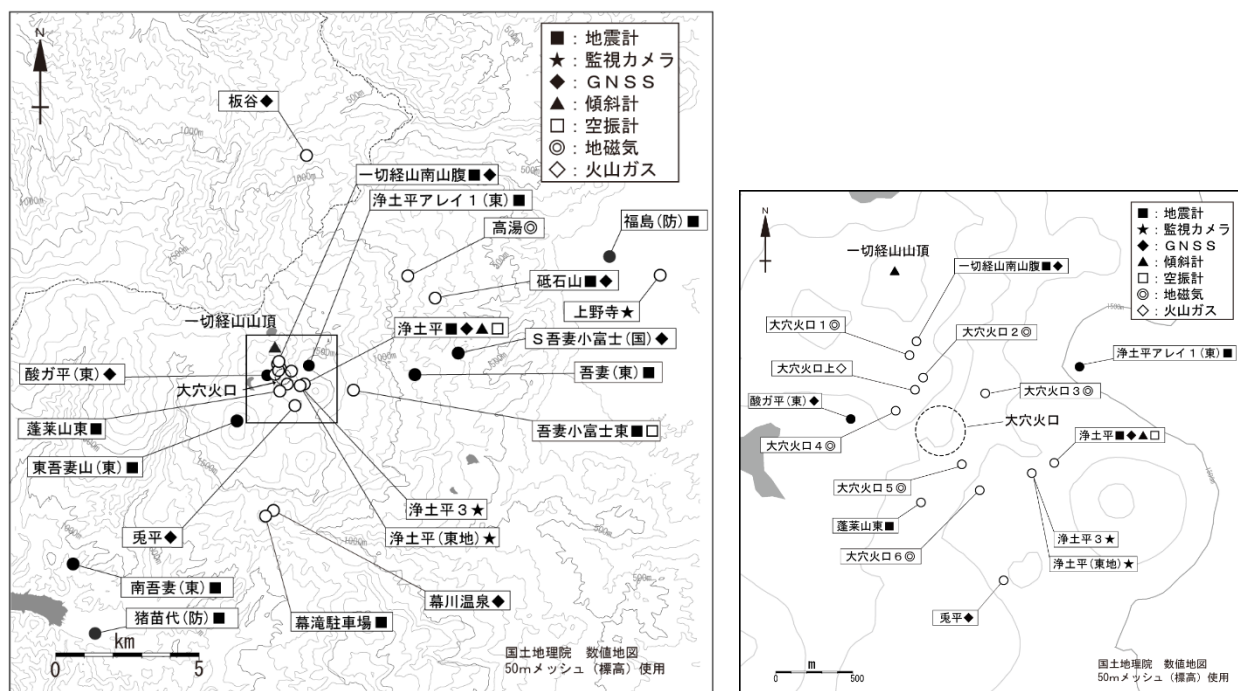


図 23 吾妻山 観測点配置図

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

左図の四角囲みは右図の表示範囲を示しています。

（東地）：東北地方整備局 （国）：国土地理院 （東）：東北大学 （防）防災科学技術研究所

表 1 吾妻山 気象庁観測点一覧

観測種類	観測点名	位置			設置高 (m)	観測開始日	備考
		北緯	東経	標高 (m)			
地震計	吾妻小富士東	37° 43.34'	140° 16.53'	1295	-1	1965.07.01	
	浄土平	37° 43.46'	140° 15.36'	1584	-98	2010.09.01	
	一切経山南山腹	37° 43.87'	140° 14.76'	1875	0	2001.08.09	
	砥石山	37° 45.09'	140° 18.43'	745	-1	2012.12.01	
	幕滝駐車場	37° 41.03'	140° 14.53'	1295	-1	2012.12.01	
	蓬萊山東	37° 43.32'	140° 14.79'	1650	-1	2016.12.01	広帯域地震計
空振計	吾妻小富士東	37° 43.34'	140° 16.53'	1295		1998.11.01	
	浄土平	37° 43.46'	140° 15.36'	1584	4	2010.09.01	
傾斜計	浄土平	37° 43.46'	140° 15.36'	1584	-98	2011.04.01	
GNSS	板谷	37° 47.75'	140° 15.42'	809	8	2001.11.01	
	幕川温泉	37° 41.05'	140° 14.61'	1291	9	2001.11.01	
	一切経山南山腹	37° 43.87'	140° 14.76'	1875	1	2001.08.09	
	浄土平	37° 43.46'	140° 15.36'	1584	3	2012.11.09	
	砥石山	37° 45.09'	140° 18.43'	745	5	2012.11.28	
	兎平	37° 43.04'	140° 15.14'	1590	5	2012.11.09	
監視カメラ	上野寺	37° 45.52'	140° 23.77'	112	9	1998.11.27	
	浄土平3	37° 43.42'	140° 15.26'	1576	5	2016.12.01	熱映像
火山ガス	大穴火口上	37° 43.71'	140° 14.75'	1885	2	2015.11.22	
地磁気	大穴火口1	37° 43.83'	140° 14.73'	1875	2	2015.11.21	
	大穴火口2	37° 43.75'	140° 14.79'	1878	2	2015.11.21	
	大穴火口3	37° 43.70'	140° 15.06'	1651	2	2015.11.21	
	大穴火口4	37° 43.64'	140° 14.67'	1834	2	2015.11.21	
	大穴火口5	37° 43.45'	140° 14.96'	1647	2	2015.11.21	
	大穴火口6	37° 43.36'	140° 15.04'	1584	2	2015.11.21	
	高湯	37° 45.49'	140° 17.81'	925	2	2015.11.21	